
久留米市子どもの生活実態調査結果
(アンケート調査)

速 報

平成 30 年 3 月

目 次

調査の概要	3
生活困難世帯の定義	3
1 世帯の状況	
(1) 世帯構成の状況	5
(2) 経済的な状況	5
2 子どもの状況	
(1) 属性	6
(2) 生活習慣の状況	6
(3) 健康の状況	6
(4) 食の状況	6
(5) 子どもの学び	7
(6) 子どもの生活	8
(7) 子どもの自己肯定感	8
(8) 子どもの困っていること	9
3 保護者の状況	
(1) 属性	10
(2) 就労状況	10
(3) 保護者の意識	11
(4) 子どもとの過ごし方	12
(5) 子どもの進路	13
(6) これまでの家族との関わり	14
(7) 近所や地域とのつながり	14
4 制度・サービスの利用	16
(1) 制度やサービスの利用	16
(2) 必要な支援	17

調査の概要

(1) 調査対象者

- ・久留米市内の小学校 48 校に通う小学 5 年生の児童とその保護者
- ・久留米市内の中学校 21 校に通う中学 2 年生の生徒とその保護者

(2) 調査対象数 5,341 世帯

(3) 調査方法 学校配布・郵送回収

(4) 調査期間 平成 29 年 9 月 14 日から 9 月 29 日まで

(4) 回収結果

		調査対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)
保護者	小学校5年生	2,849	1,329	46.6%
	中学校2年生	2,492	933	37.4%
	不明	—	10	—
	合計	5,341	2,272	42.5%
子ども	小学校5年生	2,849	1,333	46.8%
	中学校2年生	2,492	934	37.5%
	不明	—	5	—
	合計	5,341	2,272	42.5%

生活困難世帯の定義

今回の報告書では、指標として「生活困難世帯」を、次の3つの要素から分類する。

①低所得

世帯の可処分所得を世帯人員数の平方根で割り出した値 (= 等価可処分所得) が、厚生労働省「平成 27 年国民生活基礎調査」で算出された国の貧困線「122 万円」を下回る。

注意：今回の算出に用いた世帯の可処分所得は、選択されたカテゴリの中央値（例えば可処分所得が「300 万円以上～400 万円未満」と回答した世帯は 350 万円を可処分所得とした）を使用しているなど、世帯所得の把握の方法が厚生労働省とは違うため、この低所得世帯の割合は厚生労働省が公表している「子供の貧困率」とは比較できない。

②家計の逼迫

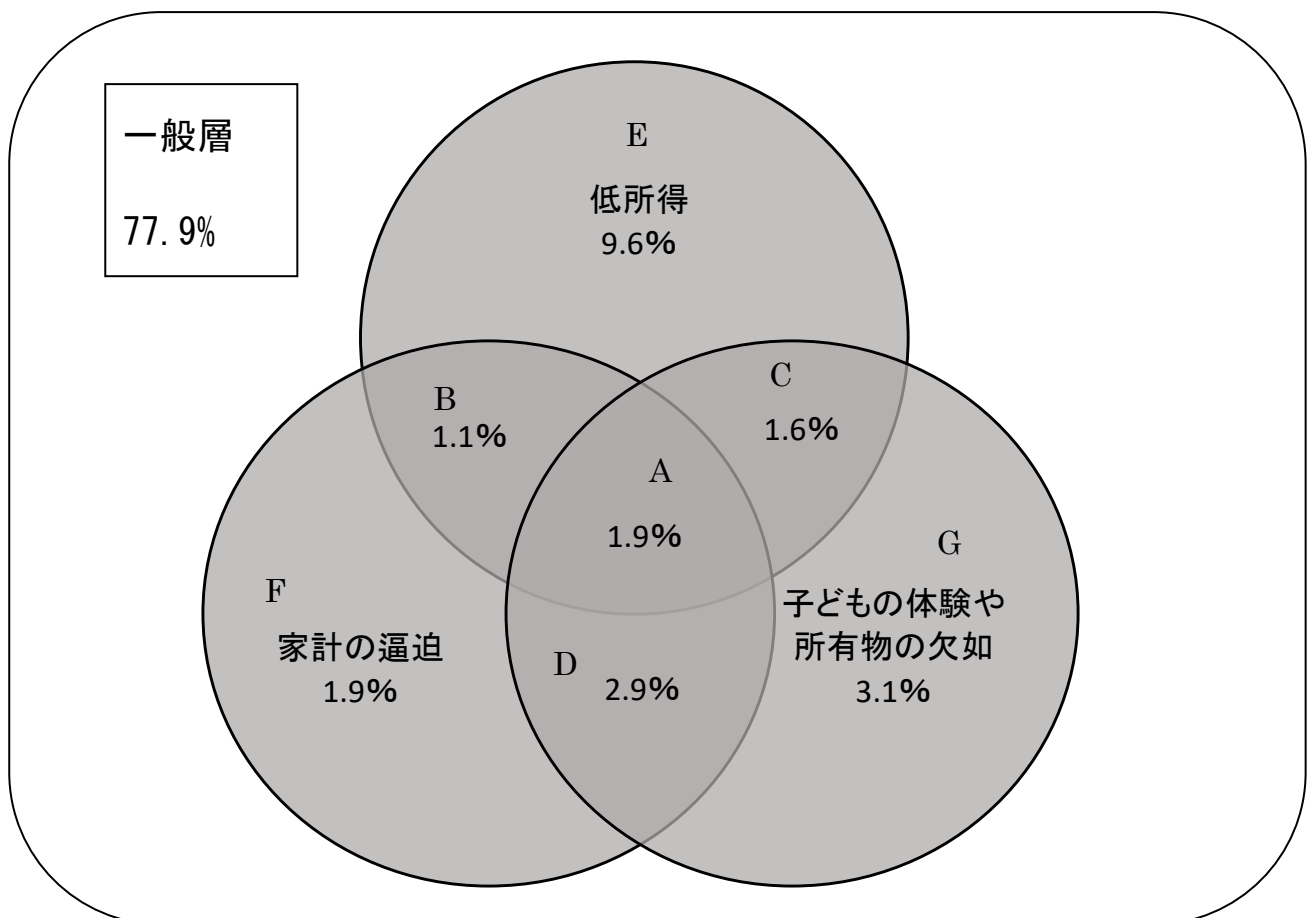
経済的な理由で「公共料金や家賃の滞納があった」、「医療機関の受診ができなかった」など全 17 項目のうち、6 項目以上該当する。

③子どもの体験や所有物の欠如

子どもの体験や所有物など 11 項目のうち、経済的な理由で欠如している項目が 3 項目以上ある。

「低所得」や「家計の逼迫^{ひっばく}」「子どもの体験や所有物の欠如」のうち、2つ以上に該当し、生活が困窮していると思われる「困窮層」が7.5%、いずれか1つの要素に該当する「周辺層」が14.6%となり、「困窮層」「周辺層」を合わせた『生活困難世帯』は、22.1%となっている。

生活困難世帯	困窮層	3つに該当	低所得 + 家計の逼迫 + 子どもの体験や所有物の欠如 A	1.9%	7.5%	22.1%
		2つに該当	低所得 + 家計の逼迫 B	1.1%		
			低所得 + 子どもの体験や所有物の欠如 C	1.6%		
			家計の逼迫 + 子どもの体験や所有物の欠如 D	2.9%		
	周辺層	1つに該当	低所得のみ E	9.6%	14.6%	
			家計の逼迫のみ F	1.9%		
			子どもの体験や所有物の欠如のみ G	3.1%		
一般層	非該当				77.9%	



1 世帯の状況

(1) 世帯構成の状況

困窮層、周辺層では、一般層と比較して「ふたり親世帯」の割合が低く、「母子世帯」の割合が高い。特に困窮層では「母子世帯」が約4割となっている。

区分		ふたり親 の世帯	ひとり親 の世帯		その他 の世帯
			母子	父子	
全体		79.3%	11.3%	1.4%	6.6%
生活困難層	困窮層	54.7%	38.2%	1.8%	4.1%
	周辺層	66.3%	23.8%	1.2%	7.2%
一般層		84.1%	6.3%	1.4%	6.7%

*無回答があるため、合計が100%にならない

(2) 経済的な状況

日常生活の状況、子どもへの支出は生活困難度により大きな差がある。

① 経済的な理由で経験したこと

項目	困窮層	周辺層	一般層
水道・電気・ガスのどれかを止められたことがある	9.4%	2.4%	0.2%
家賃の支払いができなかった	19.4%	1.8%	0.6%
医療機関の受診ができなかった	43.5%	7.5%	0.6%
新しい衣服や靴を買うのを減らした	91.8%	54.5%	30.1%
趣味やレジャーの出費を減らした	76.5%	52.7%	28.9%

② 経済的な理由で子どもにしてあげられなかったこと

項目	困窮層	周辺層	一般層
子どもを医療機関に受診させることができなかった	24.7%	3.0%	0.3%
子どものための本が買えなかった	24.7%	4.5%	0.1%
子どもに必要とする文具や教材が買えなかった	14.7%	2.7%	0.1%
子どもを学習塾やスポーツなどの習い事に通わせることができなかった	67.6%	26.2%	6.4%
子どもを旅行やレジャーに連れていくことができなかった	75.9%	44.6%	14.4%

2 子どもの状況

生活困難度が高い層の子どもは、生活面や学習面で課題を持っていることが多く、「大学への進学希望」や「自己肯定感」といった将来に対する希望や意欲についても、生活困難度が高い層ほど低くなっている。

(1) 属性

全体では、「小学生」が58.7%、「中学生」が41.1%となっている。

(2) 生活習慣の状況

生活困難度が高い世帯ほど、起床・就寝時間が遅い割合が高く、学校への遅刻につながるなどしている。世帯の経済的な状況が子どもの生活に影響を及ぼしている。

項目	困窮層	周辺層	一般層
午後11時前に寝る	47.9%	61.0%	63.1%
午前7時より前に起きる	55.7%	58.3%	66.6%
「週に2、3回」「毎日、ほとんど毎日」遅刻する	4.8%	2.7%	2.0%

(3) 健康の状況

生活困難度が高い層ほど、未治療の虫歯があっても治療の予定がない割合が高い。

項目	困窮層	周辺層	一般層
虫歯（未治療）がある	13.5%	12.0%	6.5%
虫歯（未治療）があるが、治療予定がない	30.4%	25.0%	18.3%

(4) 食の状況

生活困難度が高い世帯ほど、毎日3食きちんと食べる生活が保障されていない状況にあり、食事自体が「用意されていない、食べるものがない」割合も高くなっている。また、孤食の割合も高い。

①朝食摂取

項目	困窮層	周辺層	一般層
朝食を「週に1回程度食べる」「食べない」	5.4%	2.7%	1.6%
朝食を食べない理由が「用意されていない」「食べるものがない」	7.1%	3.4%	2.9%

②孤食の状況

項目	困窮層	周辺層	一般層
ひとりでご飯を食べることが「よくある」「ときどきある」	37.7%	28.4%	24.1%
ひとりでご飯を食べる際、「親やきょうだいが作ったものを食べる」	49.2%	58.5%	62.0%

(5) 子どもの学び

生活困難度が高いほど、授業時間以外での学習時間が短く、「まったくしない」の割合が一般層の2倍以上である。塾等に通う割合も低い。また、大学進学への希望は生活困難度が高いほど、低くなっている。

① 小学校5年生

項目	困窮層	周辺層	一般層
学校の授業が「わからないことが多い」「ほとんどわからない」	15.3%	3.6%	2.6%
学校の授業時間以外での勉強は「まったくしない」	14.1%	11.9%	7.3%
学習塾、家庭教師に通っている	20.0%	22.2%	32.2%
大学への進学希望	25.9%	30.9%	41.9%

② 中学校2年生

項目	困窮層	周辺層	一般層
学校の授業が「わからないことが多い」「ほとんどわからない」	20.5%	18.5%	9.8%
学校の授業時間以外での勉強は「まったくしない」	14.6%	15.6%	5.7%
学習塾、家庭教師に通っている	29.3%	35.6%	53.9%
大学への進学希望	30.5%	37.0%	52.9%

(6) 子どもの生活

困窮層の子どもは、周辺層や一般層の子どもに比べ、若干ではあるが放課後一人であることが多く、家族や友だちと一緒に過ごす割合が低い。ゲーム機やスマートフォンなど電子機器や情報端末機に触れる時間が長く、それを楽しいと感じる割合もほかの層に比べると高い。また普段から近所や親戚等とのつながりが希薄な傾向にあることがわかる。

① 放課後過ごす人が多い人

項目	困窮層	周辺層	一般層
学校の友だち	62.3%	64.7%	65.3%
おうちの大人	49.7%	57.4%	58.3%
ひとりである	19.2%	14.8%	14.7%

② 毎日の生活で楽しいと思う場面

項目	困窮層	周辺層	一般層
友だちと過ごしているとき	80.2%	85.5%	89.0%
お家の人と過ごしているとき	59.3%	64.0%	69.0%
ひとりであるとき	31.7%	29.0%	27.8%

③ ゲーム機やスマートフォンの使用について

項目	困窮層	周辺層	一般層
ゲームをしているとき楽しいと感じる	67.7%	65.6%	64.8%
インターネットをしているとき（スマートフォンを含む）楽しいと感じる	59.9%	54.1%	50.1%
ゲーム機やスマートフォンの使用時間が 3 時間以上	25.1%	13.3%	10.7%

④ 親戚や近所との付き合い

項目	困窮層	周辺層	一般層
親戚との付き合いがない	15.2%	10.3%	7.1%
近所との付き合いがない	21.0%	15.7%	10.7%

(7) 子どもの自己肯定感

生活困難度が高いほど、自分に対する自信や将来の夢・目標を持たず、困窮層は将来に向けた意欲が低い。

下記の各項目について「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた割合

① 小学校5年生

項目	困窮層	周辺層	一般層
自分に自信がある	51.8%	67.5%	70.9%
自分の将来の夢や目標を持っている	80.0%	81.4%	83.0%
将来のためにも、今頑張りたいと思う	77.7%	86.0%	83.1%

② 中学校2年生

項目	困窮層	周辺層	一般層
自分に自信がある	41.5%	40.7%	53.1%
自分の将来の夢や目標を持っている	58.5%	63.0%	64.7%
将来のためにも、今頑張りたいと思う	78.1%	82.5%	87.5%

(8) 子どもの困っていること

生活困難度が高いほど、嫌なことや困っていることが「ある」とする回答の割合が高く、「学校や勉強のこと」や「進学・進路のこと」をはじめ、多くの項目でほかの層に比べ困っている割合が高い。

項目	困窮層	周辺層	一般層
嫌なことや困っていることがある	52.1%	43.5%	41.8%
学校や勉強のこと	27.5%	21.5%	20.1%
友だちのこと	18.6%	14.5%	14.6%
進学・進路のこと	18.0%	17.8%	14.9%
自分のこと	13.8%	13.0%	10.9%
おうちのこと・家族のこと	13.8%	6.6%	9.0%
好きなひとのこと	9.6%	5.4%	4.6%

3 保護者の状況

生活困難度が高い層の保護者は、生活や経済面に余裕がなく、子育てに関する不安や負担感が大きい。加えて社会や地域とのつながりが薄い傾向にある。また本来利用できるはずの支援や制度について「知らない」、「手続きがわからない」との回答が一定割合ある。

(1) 属性

生活困難度が高い世帯ほど、初めて親になった年齢が低い割合が高い。

初めて親となった年齢

項目	困窮層	周辺層	一般層
19歳以下	11.2%	4.2%	1.2%
20歳～24歳	26.5%	26.2%	15.7%
25歳～29歳	36.5%	41.3%	44.3%

(2) 就労状況

生活困難世帯は一般層と比べ、「常勤・正規職員」の割合が低く「非常勤・パート・アルバイト」の割合が高い。また帰宅時間には大きな差はない。休日日数はどの層も「週2日程度」と答えた割合が約5割である。

①就労状況（回答者）

項目	困窮層	周辺層	一般層
常勤・正規職員	26.5%	24.2%	30.9%
非常勤・パート、アルバイト等	47.6%	43.4%	37.0%

②帰宅時間（回答者）

項目	困窮層	周辺層	一般層
18時まで	51.7%	58.8%	58.2%
18～20時	26.5%	21.5%	25.2%
20時以降	6.6%	6.0%	5.3%

③休日日数（回答者）

項目	困窮層	周辺層	一般層
月 1～3 日程度	3.3%	3.5%	1.1%
週 1 日程度	23.8%	15.5%	12.6%
週 2 日程度	51.0%	50.4%	54.6%
週 3～4 日程度	9.3%	15.8%	19.3%

(3) 保護者の意識

子どもに関して困っていることについて、いずれの項目も、生活困難度が高い層ほど、困っている割合が高くなっている。小学生では最も高い割合を示す項目が「学力・学習習慣」であり、周辺層、一般層においては、中学生になってもこれは変わらないが、困窮層においては「教育に要する費用」が最も高くなっている。

また、困窮層では、身近に相談する相手がいない（もしくは相談しない）割合が高く、「働いても働いても生活が楽にならない」「いろいろなプレッシャーに押しつぶされそうな気持ちになる」と感じている人の割合が高い。

①小学生の保護者が子どもに関して困っていること

項目	困窮層	周辺層	一般層
学力・学習習慣	62.4%	46.9%	43.0%
進学	25.9%	10.3%	5.9%
教育に要する費用	55.3%	29.9%	14.6%
生活習慣	25.9%	17.5%	19.0%
子どもと関わる時間	28.2%	20.6%	16.5%

②中学生の保護者が子どもに関して困っていること

項目	困窮層	周辺層	一般層
学力・学習習慣	72.0%	64.4%	52.2%
進学	41.5%	23.0%	14.4%
教育に要する費用	76.8%	39.3%	15.5%
生活習慣	32.9%	16.3%	16.2%
子どもと関わる時間	28.0%	11.1%	15.5%

③困っていることについての相談者

項目	困窮層	周辺層	一般層
家族・親族	54.7%	57.5%	63.1%
友人・知人	30.6%	34.6%	37.5%
公的な相談窓口（市役所等）	10.6%	3.9%	1.5%
適当な相談相手がいない（いなかった）	15.3%	9.6%	3.4%
相談しない（しなかった）	22.9%	18.7%	11.0%

④相談相手がいない、または相談しない理由

項目	困窮層	周辺層	一般層
信頼できる人がいないから	28.8%	28.6%	11.9%
理解してもらえないから	15.3%	19.0%	16.9%
最初からすべてのことを話すことは負担だから	11.9%	26.2%	16.9%
悩んでいることを知られたくないから	20.3%	23.8%	8.2%
相談しても事態は変わらないから	66.1%	64.3%	55.4%

⑤現在の生活意識

下記の各項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人

項目	困窮層	周辺層	一般層
現在、自分の生活は充実している	28.8%	57.2%	77.8%
将来に希望を持っている	17.0%	43.0%	63.5%
今の生活でつらいことのほうが多い	66.4%	40.9%	18.7%
働いても働いても生活が楽にならない	86.4%	65.0%	30.7%
いろいろなプレッシャーに押しつぶされそうな気持ちになる	70.6%	47.9%	32.2%

(4) 子どもとの過ごし方

どの層も、子どもと一緒に過ごす時間が長い人は「お母さん」であるが、生活困難度の高い層では、きょうだいと過ごす子どもの割合が一般層に比べると高い。

また、「子どもの勉強をみる」、「子どもと学校生活の話をする」、あるいは「子どもと外出をする」などの頻度は、生活困難度が高いほど、低くなっている。

①子どもと過ごす時間が長い人

項目	困窮層	周辺層	一般層
お母さん	65.3%	65.4%	76.6%
お父さん	2.4%	1.8%	2.4%
きょうだい	24.1%	19.6%	11.6%

②子どもとの過ごし方で以下の項目について「月1～2回」より少ないと回答した人

項目	困窮層	周辺層	一般層
お子さんの勉強をみる	53.5%	49.4%	43.9%
お子さんと学校生活の話をする	8.9%	4.2%	4.2%
お子さんといっしょに外出する（遊びやイベント等）	20.0%	9.6%	8.9%

(5) 子どもの進路

いずれの層においても、大学・大学院への進学希望の割合が最も高く、生活困難世帯では約4割、一般層では約6割である。生活困難世帯では、高等学校への進学希望が一般層に比べると高い。また、生活困難度が高い層ほど、希望通りに進学できないと思う割合が高く、その最大の理由は経済的に余裕がないことである。

①子どもの希望最終学歴

項目	困窮層	周辺層	一般層
高等学校	27.1%	21.1%	8.7%
短大	6.5%	4.8%	4.1%
大学・大学院	41.2%	39.5%	59.8%
専修学校・各種学校	11.2%	17.8%	11.3%
特にない	3.5%	6.6%	5.0%
わからない	8.2%	6.6%	8.0%

②希望通り進学できると思うか

項目	困窮層	周辺層	一般層
思う	55.3%	70.1%	81.0%
思わない	42.0%	25.3%	15.1%
無回答	2.7%	4.5%	3.8%

③ 希望通り進学できないと思う理由

項目	困窮層	周辺層	一般層
子どもの希望と異なるから	4.8%	21.9%	29.3%
子どもの能力から考えて	12.7%	19.2%	26.3%
経済的に余裕がない	81.0%	43.8%	17.7%
勉強のサポートができない	0.0%	1.4%	4.7%

(6) これまでの家族との関わり

保護者自身の、家族との関わり等について生活困難度別にみると、各項目について、困窮層が周辺層、一般層と比較していずれも「経験がある」割合が高い。

項目	困窮層	周辺層	一般層
両親が離婚した	26.5%	14.8%	11.2%
成人する前に父または母が死亡	3.5%	6.9%	5.5%
家庭内の事情により親と離れて暮らしたことがある	20.6%	9.0%	5.5%
親から暴力を振るわれたことがある	24.7%	16.3%	12.3%
親と疎遠になっている (なっていた)	27.6%	11.7%	6.9%

(7) 近所や地域とのつながり

近所・地域での付き合いについて、生活困難度の高い世帯ほど「挨拶をする程度」「ほとんどつきあいがない」の割合が高く、子どもを預かってくれる親族や友人・知人が身近にいない割合も高い。また、地域での団体への所属についても、困窮層は他の層と比べると経験のある割合が低い項目が多い。

①近所・地域での付き合い

項目	困窮層	周辺層	一般層
困ったときに、何でも相談し助け合える	1.2%	3.9%	4.1%
困ったときに、内容によっては相談し助け合える	12.9%	19.0%	24.7%
世間話をする程度	22.9%	28.0%	29.7%
挨拶をする程度	47.6%	41.5%	36.6%
ほとんどつきあいがない	15.3%	6.9%	4.2%

②近所（30分以内で行き来できる範囲）に子どもを預かってくれる親族・友人

項目	困窮層	周辺層	一般層
いる	57.6%	73.5%	75.3%

③団体への所属経験

項目	困窮層	周辺層	一般層
子育てや市民活動などのサークル団体	8.8%	10.2%	13.9%
自治会	42.4%	40.4%	50.5%
子ども会	53.5%	63.0%	61.5%
校区で活動する組織	20.6%	20.5%	23.7%
所属したことがない	24.7%	23.8%	16.2%

4 制度・サービスの利用

困窮層の中には、本来利用できる支援制度・サービスについて、情報が届かず、利用していない世帯がある。また、必要な支援としては経済的支援を求める割合が高い。

(1) 制度やサービスの利用

久留米市や地域などにおける子ども・子育て支援関連の制度および施設（サービス）等の利用の有無等についての問いに、「利用あり」の割合が高かったものは「児童手当」「保育所・認定こども園・幼稚園」「学童保育所」で、生活困難度別でみた場合のどの階層でも割合が高かった。「就学援助制度」、「児童扶養手当」については、生活困難度が高い層ほど利用割合が高い。

一方で、「就学援助」や「生活保護」等については、制度の対象となりえる困窮層においても「制度や施設等を知らない」「手続きがわからない」という回答が一定数ある。

また、生活困難度が高い層ほど各種生活・学習・子育て支援関連事業、施設についても「知らない」とする割合が高い。

①利用したことがある制度やサービス

項目	困窮層	周辺層	一般層
児童手当	97.1%	94.0%	91.6%
就学援助制度	68.2%	46.1%	18.0%
児童扶養手当	50.6%	31.0%	16.0%
生活保護	7.1%	3.3%	0.6%
久留米市生活自立支援センター	4.1%	0.9%	0.7%
子どもの学習支援事業（生活保護・生活困窮者）	4.1%	2.4%	0.5%
保育園・認定こども園・幼稚園	69.4%	72.6%	74.6%
学童保育所	46.5%	46.4%	44.7%
子育て支援センター	21.2%	20.8%	31.5%
校区の子育てサロン	18.2%	17.2%	24.5%
子育て交流プラザくるるん	27.1%	24.4%	40.2%
幼児教育研究所	9.4%	6.6%	8.2%
子ども食堂	3.5%	2.4%	3.2%
病児保育	16.5%	8.4%	10.3%
ファミリー・サポート・センター	4.7%	3.6%	5.5%
学校や地域で行われている放課後等の補充学習	15.9%	11.4%	15.4%
スクールカウンセラー	22.9%	15.1%	13.5%
スクールソーシャルワーカー	2.9%	2.7%	1.1%
土曜塾	17.6%	23.5%	22.9%

②困窮層が「制度や施設等を知らない」「手続きがわからない」と答えた制度やサービス

項目	制度等を知らない	手続きがわからない
子ども食堂	38.8%	7.6%
久留米市生活自立支援センター	31.8%	5.3%
スクールソーシャルワーカー	28.8%	7.6%
子どもの学習支援事業（生活保護・生活困窮者）	24.1%	6.5%
スクールカウンセラー	17.1%	4.1%
児童扶養手当	10.6%	2.4%
就学援助制度	7.1%	4.1%
生活保護	5.3%	5.9%
幼児教育研究所	34.7%	6.5%
ファミリー・サポート・センター	32.9%	7.6%
土曜塾	30.0%	7.1%
学校や地域で行われている放課後等の補充学習	30.0%	7.1%
病児保育	21.8%	8.2%
子育て支援センター	20.0%	4.7%
子育て交流プラザくるるん	20.0%	3.5%

(2) 必要な支援

子どもに必要なまたは重要だと思える支援等について、「子どもの進学・就学にかかる費用の軽減」、「子どもの医療費の無料化・負担軽減」はどの層においても割合が高いが、生活困難度が高い階層ほど割合が高く、実際に経済的な支援を望んでいることがわかる。加えて、困窮層の約7割が「子どもの学習支援」を望んでいる。

保護者自身が必要または重要だと思える支援等については、多くの項目で、生活困難度が高い階層ほど、支援を必要とする割合が高い。困窮層は、生活に関する経済的支援や資格習得・就労の支援、病気や障害のことについての専門的支援を望む割合が大きくなっている。

①子どもに必要なまたは重要だと思える支援

項目	困窮層	周辺層	一般層
子どもの進学、就学にかかる費用の軽減	94.1%	89.5%	82.1%
子どもの医療費の無料化・負担軽減	73.5%	65.7%	59.5%
子どもの学習支援	67.6%	47.6%	38.0%
放課後の居場所づくり	39.4%	32.8%	32.1%
子どもの生活習慣づくり	32.4%	27.7%	30.2%

②保護者に必要または重要だと思う支援

項目	困窮層	周辺層	一般層
住宅に関する支援（住宅を探す、住宅費の軽減）	47.6%	24.1%	11.1%
一時的に必要なとなる資金の貸付	44.7%	19.9%	7.5%
資格取得のための支援	37.6%	25.3%	17.6%
就職のための支援	30.6%	25.6%	13.8%
専門的な相談（病気や障害など）	29.4%	17.8%	15.1%
一時的な子どものあずかり	24.7%	18.1%	17.1%
同じような悩みを持った保護者同士が知り合える	20.6%	21.4%	20.4%
専門的な相談（離婚や養育費など）	20.0%	12.0%	7.5%
専門的な相談（学校や保育園のことなど）	15.3%	10.8%	9.2%
民生委員や主任児童委員などの支援	1.8%	2.7%	1.6%